

麥谷邦夫著『六朝隋唐道教思想研究』

山田 俊

京都大學人文科學研究所で長年に亙り日本の道教研究を牽引してこられた麥谷邦夫氏（以下著者）が『六朝隋唐道教思想研究』を刊行された。著者の道教研究の主幹となる道教教理研究を軸に纏められた待望の著書である。本著は以下の内容から構成される。

まえがき

第一部 道教教理思想の形成

第一章 魏晉南北朝期の道家・道教における氣

第二章 道教的生成論の形成と展開

第三章 『老子想爾注』と道氣論

第二部 道教教理思想の諸相

第一章 道教教理における天界說

第二章 初期道教における救濟思想

第三章 道教における眞父母の概念と孝

第三部 道教教理體系と佛教教理學

第一章 『道教義樞』と南北朝隋初唐期の道教教理學

第二章 道教教理學と三論學派の論法

第三章 唐代老子注釋學と佛教

第四章 道教類書と教理體系

第四部 唐玄宗三教思想研究

第一部 玄宗『道德眞經』注疏における「妙本」

第二部 玄宗と『道德眞經』注疏の撰述

第三部 玄宗と三經御注

あとがき

事項索引

書名・人名索引

本書は著者が理解する道教教理史の展開、即ち雑多な要素を時間の経過とともに重層的に積み上げてきた教理の體系化（「まえがき」）の経緯が投影された構成となっている。具體的には、道教以前のより一般的文獻に見られる「氣」の検討から始め、それが「道氣」へと展開する経緯を辿り、其の他の教理概念との關わりを踏まえながら、道教教理の論述を主目的とする文獻の検討を経て、著者が道教教理の一應の完成時期（第二部第一章）¹と見做す玄宗の思想検討へと進む。本書が分析する教理の多くは、現在の日本の道教教理研究に於いて基本的了解事項として概ね受け入れられているものと言えるが、以

下、「道氣」を巡る思想状況の推移と佛道思想の交流を軸に本書の内容を紹介することにする。

第一部を通底する「道氣」の概念は本書全體の關鍵的役割を果たす。

先ず、「道氣」概念誕生以前の重要事例として『河上公注』の氣論を指摘し、道家思想と道教の氣論の接點に立ち、「道」が始元的な「元氣」を吐出し、そこに萬物が自生自化するという、後漢までの宇宙生成論を援用したものと位置附ける（一一）。その後、四世紀以降になると、「道」と「氣（元氣）」を同一次元において捉え、一體性を強調する思想が出現する。こうした「道氣」の概念の中から、從來の論では「元氣」が擔っていた役割を「道氣」が擔い、萬物と「道」が「元氣」などの二次的なものを媒介せず、「道」そのものの氣である「道氣」を介して直接的に關係させる立場が現れて来る。こうした「道氣」を説く文獻の一つ『老子想爾注』では「道」の神祕化・擬人化が進み、「道」「道氣」「自然」「一」「太上老君」を同一の法體のいわば應身と見做している

とする。(一一三)。

この「道氣」概念の檢證は『老子想爾注』の文獻研究に導入され、使用概念・語彙を思想的に分析すること、で編纂時期の議論に決着をつけようとする。これを目的とした著者の『老子想爾注索引』(朋友書店、一九八五年)刊行の反響が大きかったことを讀者は記憶しているであろう。

また、六朝後半頃に生じた奇數系列の生成論(一一二)を軸とした道教神學の檢證は、「九氣」を軸とした天・神・人の一體化と、九天の氣の降下による人の誕生の考察へと展開し、人を生み出す「受胎父母」「眞父母」という二重の「父母」と、それに對する世俗の孝と宗教的次元の孝という興味深い分析を導き出している(一一三)。

この「道氣」を巡る次なる推移は第三部以降で考察される。

六朝唐の佛道論争に於いて、形而下の「氣」を究極とする道教は常住不滅の理を體とする佛教には及ばないと

いう佛教側の批判を受け、「道は理なり」の立場が出現する。その後、「道は理なり」という定義が七世紀末には道佛を問わず廣く普及し、道佛論争が他のテーマへと移行したことに伴い、道教に於ける「道は理なり」の役割は終了し、玄宗の『老子』注疏、杜光庭『廣聖義』では再び「道は氣なり」の立場が復活してくると整理する。「道即理」を説く『玄門大義』が顧みられなくなった原因の一つをこうした思想的推移に求めているのは、興味深い指摘と言えよう(一一二)。

この推移は、成玄英と玄宗の注釋を材料に具體的に檢證される。

「道は氣なり」という中國固有の哲學を反映した理論が對佛敎理論の場では必ずしも有利ではないと判斷した六朝後半期の道教の經師たちが新たな理論形成を試みた例として成玄英が紹介される。成玄英は、『老子』の説く道を「妙本」と「應道」とに分割し、「應道」を形而下レベルでは「元氣」と見なし、從來の「道は氣なり」という解釋を放棄せずにすむ餘地を残した。「妙本」と

「應道」「元氣」の關係は、直接的な生成吐出關係ではなく、「從本降迹」と把握されている點に特徴があり、六朝以來の道佛論爭の中で道教側の弱點とみなされた「道は氣なり」というテーゼは、「妙本即理」、「應道即氣」という構造の中で、整理と弱點の克服が圖られた。成玄英の事例は、六朝期以來の激しい道佛論爭の中で、道教側が道の定義を變更せざるを得なかったことを示しているとする（三二二）。

これに對して、『玄宗疏』からは、當時『老子』の「道法自然」の解釋として、「道」の上位に「虛無」「自然」を置き、「虛無」「自然」から順次展開して「道」が生じるといふ解釋が存在していたこと、『疏』はそれを誤りとして新たな解釋を提示しようとしたことが知られるとする。「道」「自然」「虛無」を「妙本」の「幻體」の「體」「性」「功用」に對する個別の名稱に過ぎないとし、三者の關係を「道」のさらに奥にある窮極的實體としての「妙本」のもとに整合的に規定しようとした、それが『疏』の解釋であつたとする（四一）。

また、『玄宗注疏』に於ける「沖和の氣」の「沖和」とは、『河上公注』や成玄英『疏』のように陰陽二氣の分裂の後に、それがほどよく混じり合い調和した状態というわけではなく、未分でありながらかつ分化の契機内に宿した始原的狀態を表現し、「元氣」に相當する。この様に、『玄宗注疏』は、「妙本」概念や生成論において獨自の解釋を展開するとともに、初唐期の道佛論爭に見られた、「道」と「自然」「虛無」等の本質規定の混亂に對する最終的な回答を提示して、唐代の『老子』解釋學の一頂點を築いたとされる（四一）。玄宗期を道教教理の「完成時期」と著者が見做す所以である。

尙、第二部第二章で考察される初期道教の救済思想のみが、「道氣」との關わりが論じられていない。論文初出時期が最も早く、「道氣」関連論稿に先んじて撰述されたためと推測されるが、救済論に果たす「道氣」の役割についても著者の觀點を知りたい所である。

本著のもう一つの視點は、道・佛の思想交流を道教思想展開の一つの驅動力と見做す點である。それは「道

氣」を巡る論述にも窺えた。第二部第一章で論じられる天界説は、あくまでも中國獨自の天觀念が繼承されているとしつつも、佛教教理に對する意識から、系統を異にする天界諸説の整理と統合が圖られ、それは唐・高宗期に一應の完成を見せたとする(二―二)。

第三部第二章では、『道教義樞』「序」に見られる「王家八竝」の實體を解明し、「王家」を南朝梁の王斌と特定し、「八竝」を「論難の法」と推測した上で、「竝」とは、佛教三論學派に見られる「相手の命題が成立すると假定したうえで、その假定に従うかぎり相手の命題が否定されるような別の結論が同時に導出される」歸謬論法に相當するとする。そして、「竝」という論議形式が狭く三論學派内で用いられていたことを指摘する。この分析は、道教教理の展開が三論學派と密に關連していたことを示し、同時に、敦煌文書B D O四六八七以外の道教文獻に「竝」の痕跡が見られないことは、三論學派の衰退と關連すると推測する(三―二)。

こうした道佛の思想上の密な關わりの痕跡を検證する

ことで、玄宗『御注金剛般若經』の性格を逆の意味でより鮮明化する。三教間での佛教の地位を安定させようとする佛教側の請願を受け入れて短期間で完成された『御注金剛般若經』は、必ずしも玄宗自身の内發的要求にもとづくものではなく、三教政策上のバランスをとるという政治的效果のもとに撰述されたとする。『御注金剛般若經』に見られる三論と「重玄」の論理の影響は、基本的には『老子』御疏に於ける「重玄」の論理の援用の延長線上にあるとされ、佛典の解釋に當たっても三論的な論理を基盤とする『老子』解釋が有用な枠組みとして機能することができたのだと指摘し、このことは、玄宗が當時の『老子』解釋學の主流であった重玄を旨とする立場に引き附けて『金剛般若經』を解釋していたことを意味し、そのことが『御注金剛般若經』が佛教教學の立場から大して評價されなかった理由ではないかと推測する(四―三)。

第三部第四章では、「類書」を「この世界のあらゆる構成要素を反映し、編纂者の根本的な世界觀に基づいて

全體の構成を行うもの」と定義し、佛教類書の編纂には經藏と經目の存在が不可缺であったことを先ず指摘し、その上で、道教類書の編纂に当たっても、大部の道教經典を收藏する經藏の存在と目録の編纂とが前提條件となっていたはずとし、北周では通道教觀がその役割を擔い、玄宗朝では、長安において道經が集められて經藏が置かれ、その經目と音義が編まれるとともに、『妙門由起』という類書形式の道教教理の概要を示す書物が編纂された點を指摘する（三一四）。

以上の二つの視點の他にも、『道教義樞』の少なくとも「釋」の部分は『玄門大義』とほぼ同内容で、孟安排が獨自に補った部分は皆無であり、『道教義樞』に見られる「舊云」「今明」「今謂」「今難」「今尋」などの部分も恐らくは『玄門大義』に本來備わっていた記述であり、『道教義樞』を通して知られる道教教理は、基本的には隋末に編まれた『玄門大義』の教理であって、孟安排が『道教義樞』を編んだ時期のものではないとの指摘も重要である（三一一）。

註

（1） 以下、「第二部第一章」を「二一一」と略記する。

（A 5判、四四〇頁、二〇一八年一月、岩波書店、一萬四千三〇〇圓）